

学术雑誌 “ ??? ” (形態論)

著者	菅野 裕臣
雑誌名	韓国語学年報
号	1
ページ	217-212
発行年	2005-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001544/

紹介

学術雑誌 “형태론” (形態論) [形態論研究会], 박이정, 서울, 年2回刊(1号(春号)3月, 2号(秋号)9月). 編集代表: 高永根(ソウル大); 編集委員: 具本寛(西京大), 金永旭(ソウル市立大), 柴政坤(韓国科学技術院), 崔東柱(嶺南大); 編集諮問委員 13人. 1号平均200ページ. 6,000ウォン.

この雑誌は1999年3月にソウル大学の高永根教授を中心に創刊され,すでに4号を出している.

創刊の辞には「形態論は文法研究の中核部分である」にもかかわらず「統辞論と意味論に押されて正しく位置づけられないことがあったが,70年代から形態論に対する重要性が再び認識され」てきたとし,この雑誌は「韓国語を中心とする形態論の定立と実践的問題の解決に貢献するという意味で創刊された。」としている.さらに「韓国の学術誌はすべて学会を背景として刊行されているが,外国では編集代表および編集委員と編集諮問委員が中心となって専門的な学術誌を出すことが少なくない。」としてそれにならって雑誌の編集を行うことが述べられている.そして「遠からぬ将来韓国語が国際学術語となりうる基盤をあらかじめ磨いておこうという配慮から」「韓国語で作成した原稿だけを受けけることを原則と決めた。」とある.

この雑誌は論文,紙上討論,書評・書評論文・新刊紹介の3部からなり,論文は毎号6~8編,紙上討論は毎号2~4編,書評等は2~3編がのせられている.また第1巻第2号からは「掲示板」という欄を設け,1.「編集を終えて」として当該号のすべての掲載物に対する編集者のコメントをのせ,2.「뒷이야기」と,第2巻第2号には「質疑応答欄」(16ページ)が付けられている.

以下掲載論文等に付けられた1-1,1-2という記号はそれぞれ第1巻第1号,第1巻第2号を指す.

書評欄では歴代韓国文法書についての批判的回顧として朝鮮のもの2編—정렬모(1946), “신편고등문법” [金鎮亨1-1], 兪吉濬, 『大韓文典』, 1909 [張允熙, 李勇2-1]—, 日本のもの1編—宝迫繁勝『韓語入門』, 1880, 『日韓善隣通語』, 1880 [五十嵐孔一1-2]—, ロシアのもの1編—A. A. Холодович, «Очерк грамматики корейского языка», 1954 [洪沢奎2-2]—がとりあげられている.また書評として 유동석 (1955), “국어의 매개변인 문법”, 신구문화사 [李弼永1-1], 鄭在永(1996), “依存名詞 ‘ㄷ’의 문법화”, 太学社 [崔東柱2-1], 김창섭(1966), “국어의 단어형성과 단어구조 연구”, 태학사 [柴政坤2-1]がとりあげられているが,ほかにドイツのもの Wolfgang V. Wurnel, “Flexionsmorphologie und Natürlichkeit,” [柴政坤1-1], J. Handke, “The structure of the Lexicon,” [蔡炫植1-2], Helmut Schnelle, “Die Natur der Sprache: Die Dynamik der Prozesse des Sprechens und Verstehens,” [宋昞安2-1] がとりあげられているのは高永根教授の関心と関連があろう.同教授は今まで韓国語学であまり知られていないロシアのものも紹介したいと言っている.また刊行予定の安相哲 “形態論” の概要ものせられている[1-1].

紙上討論としては単語に関するもの—宋源容、「柴政坤(1988)の単語の概念を再考する」[1-1]—, 語彙の接辞に関するもの—柴政坤, 「‘X+ㅁ’の正体は何か」[1-1]—, 河致根, 「‘ㅁ’接辞の本質を求めて」[1-2], 文法形態素に関するもの—村田寛, 「韓国語用言活用の記述方法について」[2-1], 金星奎, 「不規則活用についてのいくつかの論議」[2-1], 禹舜朝, 「‘이다’と‘아니다’の相関性」[2-1], 許喆九, 「‘하’の形態論的性格についての討論」[2-2], 嚴正浩, 「‘-이다’の‘이’は助詞か」[2-2]があり, ほかに李珍昊, 「中世国語の語幹末有声摩擦音の性質の当否」[1-2], 李珍昊, 「2人の語学者—白定木と崔敏恒—再探」[2-2]がある。2-1には1-1の論評 [韓東完] が, 2-2には1-2の論評 [韓在永, 尹坪絃]がのっている。

さて雑誌の根幹をなす論文の部には次のものがのせられている(便宜上各論文に番号を付す。また術語は原文ままとする)。

[1-1]

1. 具本寛, 派生接尾辞の範囲
2. 蔡炫植, 造語論の規則と表示
3. 崔東柱, ‘이’系特殊助詞の文法化
4. 慎重珍, 擬声語の造語原理と単語形成参与の様相
5. 金永旭, 通時的形態分析の文法史的意味—化合形態 ‘-소서, -어쨌’を中心として—
6. 梁正昊, 先語末語尾‘-오’と形式名詞
7. 李勇, 釈読口訣の先語末語尾‘-로’について—「旧訳仁王經」を中心として—

[1-2]

8. 白斗鉉, 口訣形態‘-로로히’(-고긔)の機能についての考察
9. 張允熙, 空形態分析の妥当性の検討
10. 崔炯龍, 国語の単語構造について
11. 柴政坤, 規則ははたして必要ないか
12. 김영순, 韓国語不変詞の談話機能的成分移動
13. 金京芽, 形態音韻論的交替と形態音韻部
14. 朴鎮浩, 形態論の正当な位置づけ—隣接学問との関係を中心に—
15. 金鎮亨, 形態部と通報・話用部の関連様相—国語の形態話用論的論議の可能性—

[2-1]

16. 宋源容, 現代国語臨時語の形態論
17. 具本寛, ‘ㅁ’末音語基形成名詞の形態論
18. 嚴正浩, 助詞の範疇特性
19. 命鎮亨, 助詞連続構成と合成助詞について
20. 鄭在永, 古代国語先語末語尾の‘-느’とその変化—先語末語尾‘-내’, ‘-飛’と‘-臥’を中心に—
21. 李勇, 広修供養歌‘良焉多依’の形態論的考察

[2-2]

22. 朴鎮浩, ‘놀다’と‘놀다’についての語源論的形態分析
23. 崔炯龍, ‘-的’派生語の意味と‘-的’の生産性
24. 北村唯司, ‘動詞性名詞+되-’構成の‘되-’についての輕動詞的アプローチ
25. 韓東完, ‘-어 있-’構成の結合制約について
26. 五十嵐孔一, 連結語尾と終結語尾の呼応関係について— {-(으)니까} を中心に—
27. 權容璟, 稊讀口訣の‘七(ハ)’について

全体を通して気付くことは理論的なことを論じたものが多いということである(1, 2, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 19)。とりわけ第1巻第2号は理論特集といった感がある。例えば, 11は単語形成規則は存在せず類推だけが存在するという節に対する反論であり, 規則と類推について詳しく論じている。14は形態論に含まれる研究主題—造語論, 形態音素論, 屈折論, 形態素配列論, 語彙部学—, 形態論と統辞論の境界単位としての単語, 記号学と隣接科学の観点から見た形態論の地位等を論じている。15は形態活用論を紹介し, 韓国語研究への通用可能性をさぐったものである。16はひとつの言語共同体の個別構成員が一時的に作って使用するだけで社会的承認を得ていない状態の単語を臨時語といい, 臨時語形成辞(固有語, 漢字語)について述べ, それらが結合する過程は統辞論的ではなく形態論であるとしている。19は助詞連続, 合成助詞等についての理論的考察である。その他のものでも外国の概念から出発してその類似物を韓国語の中に見出そうとする傾向が一般に強い。

造語論の分野では1, 23, 24がある。4は擬声擬態語の内部屈折, 派生語, 合成語形成のいろいろのパターンを示している。23は漢字語の接尾辞‘-的’の意味を明らかにし, さらに‘-的’派生語における語根と接尾辞の関係, ‘-的’派生語の意味と語根の意味との関係, ‘-的’派生語の合成語の参与, ‘-的’派生語のIC分析そして‘-的’派生語の範疇を述べ, それらの辞典への記載の問題にふれている。24は‘動詞性名詞+되-’構成において, 動詞性名詞が冠形成分の修飾と関係冠形化を許容しないという点で, それが独立した統辞成分ではなく, ‘되-’がそれ自体意味領域を持たない輕動詞(light verb)であるとしている。

文法に関しては3, 18, 25, 26がある。3は‘이다’の‘이’に関して①先語末語尾の介入の可能性と出現の様相, ②‘이’の脱落の可能性, ③統合関係, ④分布等につき検討した結果, ‘이야, 이야말로, 이나, 이나마, 인들’等は特殊助詞として文法化したと言え, ‘이든지’は不特定の対象に意味する表現に結合する場合, そして‘이라도’と‘이라면’は‘-있-’が結合しない場合に特殊助詞と見なされうるとしている。18は助詞は他の品詞に比べてこれらを束ねる根拠となる範疇特性が明瞭でないが, 助詞の分布が助詞を規定しうる特性となりうるとし, 1類助詞—까지, 의, 에게…; 마저…; 아/야…; 이/가等; 2類助詞—3類助詞以外の環境にあらわれるもの; 3類助詞—마는, 그러; 4類助詞—요を挙げている。25は‘-어 있-’構成が[—結果状態性]の状況類型とは結合しえないという点で意味論的結合制約を持つものであり, 他動詞構文と結合しえないという点で統辞論的結合制約を持ち, さらに後者は[V1 어 V2]構成と[V1 고 V2]構成での‘-어’と‘-고’の選択原理に従うものであるから別途の制約として設定する必要はないと論じ

ている。26は連結語尾 {-(-으)니까} が終結語尾 {-지} と共起しやすいことを諸資料から明らかにし、様態性 (modality) が終結語尾だけでなく連結語尾にも表現しうるとし、それらの呼応関係は従属節と主節の情報が話者の領域に属していることを条件として構成されると主張している。

以上は現代語に関するものであるが、この雑誌は通時的研究をも扱っている。中期朝鮮語に関するもの(5, 6, 17, 22), 古代朝鮮語に関するもの(21), そしてなによりも釈読口訣の解説を扱ったもの(7, 8, 20, 27)が注意を引く。高永根教授が口訣研究会の会長をも兼ねているせいかもしれないが、たいへん意義深いことである。ほかに理論的なもの(9)がある。

5は2つ以上の文法形態素がひとつに合した「化合」についての通時的形態分析を通じて[丁寧(공손)]の意味をになう-오-という形態素と高麗時代の終結語尾'-지-'の痕跡が15世紀にも残っていると述べている。6は中期朝鮮語の形式名詞²¹ (關係冠形節, 補文をなす場合), ㄷ, ㅅ, ㅈ, ㅊの前にあらわれる先語末語尾-오-について15世紀, 16世紀, 17世紀を通して観察したものである。17は合成語における第1形態素の末音²²が脱落する場合と²³の後ろの²⁴, ²⁵の有声摩擦音化の問題を詳しく論じた。22は中世韓国語の資料にあらわれる'뵤닐다'と'뵤고다'における²⁶을-을を形態素²⁷을-ととらえ、²⁸을-을の終声が²⁹ㅌであったことを証明する。21は郷歌にある'良焉多依'の解説を検討し、'-언디'と解説した。7は旧訳仁王經における先語末語尾'로'の用法を検討し、8は金光明經の口訣吐'-로로히'についての詳細な検討である。20は吏読, 郷札および釈読口訣資料にもとづき、先語末語尾'-ㄴ-と-ㄴ-'の用法と変遷, それらの合流の過程を論じたものである。27は従来属格助詞と見られてきた釈読口訣の'히(へ)'について末音添記字として用いられるそれおよび終結語尾として用いられるそれとの綿密な対比において論じられている。9は「空形態」(empty morph)としては従来音声はあるが意味のない形態としての'-니라'の'니', '-오디', '-음'の'-오', '-을브터'の'을'等が挙げられたが、それらは空形態ではなく、'거스리-', '거리치-', '돌이-'等の'-이-', '빗글-', '베플-'等の'-잇글-'が空形態であると認められるとし、空形態に関連して共時的分析の次元で通時的変化についての情報を提供しようという態度を批判している。

このようにこの雑誌が広範な分野にわたる極めて多彩な内容を持つのは、この雑誌を主宰する高永根教授の関心の広さと深さに負っているであろう。そして高永根教授の育てた数多くのすぐれた弟子たちと友人らが雑誌を成り立たせる確固たる基盤を作っている。編集代表のみならず、関係の専門家による諸論文に対するコメントが与えられているのも、この雑誌の公平性を高めている。わたくしはなによりも高永根教授の今まで一貫して追及してきた韓国語学研究に対するあふれんばかりの情熱と真摯な態度に心からの敬意を表したい。

従来実用文法, 学校文法, 科学文法等々いろいろな種類の文法について語られてきた。ここでわたくしは恩師の故河野六郎先生のことばを思い出す。「格別学問的な文法というものが存在するものでなく、実用にも役立たない文法は学問的ではありえない」と。われわれは朝鮮語の実体にせまりたいと常に願っている。朝鮮語は日本語と

似かよった言語であるなどというおさまりの説はわれわれにはあまり意味はない。朝鮮語自体の法則性に深く触れたいと願ひ、そのための努力をしたいと思う。この意味ではまず新しい言語事実を明るみに出した論文がまっさきにわれわれに役立つ。かつわれわれにとって資料としても役立つ論文が読むに値するのである。少々理論は荒けずりでもよいから豊富な新しい言語事実の提示をわれわれがわれわれの雑誌『韓国語学年報』でも求めるゆえんである。われわれは雑誌『形態論』がわれわれ外国の学徒にとっても真に役立つものでありつづけてくれるよう望むものである。

雑誌『形態論』の編集部では、形態素の確認と形態素の交替、品詞論、屈折形態論、造語形態論、形態統辞論、形態意味論、形態語彙論等、文法形態の交替、意味機能、単語形成の諸問題(共時的、通時的)、海外の形態論の研究動向を把握して韓国語の形態論研究に資する研究に関する論文を募集している(ただし200字原稿用紙100枚を越えないこと)。日本からの寄稿も期待されている。

連絡先：

高永根教授研究室

서울대학교 人文대학 國語國文學科

151-742 大韓民國 서울特別市 冠岳區 新林洞 山 56-1

電話：+82-2-880-6032

e-mail:komorph@plaza.snu.ac.kr

web address: <http://plaza.snu.ac.kr/~komorph>

〈菅野裕臣〉

[注記] 脱稿してからかなり時間がたち、“형태론”(形態論)誌はすでに2004年現在で第12号を数えるに至った。この雑誌が、ともすると学会にありがちな仲間内の雑誌の私物化や、査読者の狭隘な観点から新人の意欲を削ぐようなことなしに、大胆な論文の発掘に貢献することを心から望むものである。